

ひと・模様

撮影/清水紘子

実家の前はバス停留所

— どんなお子さんでしたか。

山本 やんちゃでした。学校では落ち着きがなく、悪ふざけばかりするので、要チェックの児童だったと思います。よく先生に怒られました。友達とは、野球やドッジボール、六むし(当時流行っていたボール遊び)に興じて、外遊びばかりしていました。冬でも半ズボンで、よく駆け回っていました。

私は物心ついたころから大のバス好きで、実家がお菓子やパンや乾物も扱う酒屋だったのですが、うちの前には路線バスのバス停があったのです。店の前に陣取ってよくバスの絵を描いていました。当時はまだ砂利道で、バスが通ると埃まみれになったのですが、それでも飽きもせず紙と鉛筆を抱えて、一日中そこで描いていたこともありました。

— バスに乗るのも好きでしたか。

山本 私が育ったのは、東京都東村山市の青葉町という所で、当時は住宅地として開発が進められていました。日用品は、うちのような店舗もありましたから近隣で間に合ったのですが、衣料品などは久米川駅まで出なければ

「銀河鉄道」で地域を元気にしたい

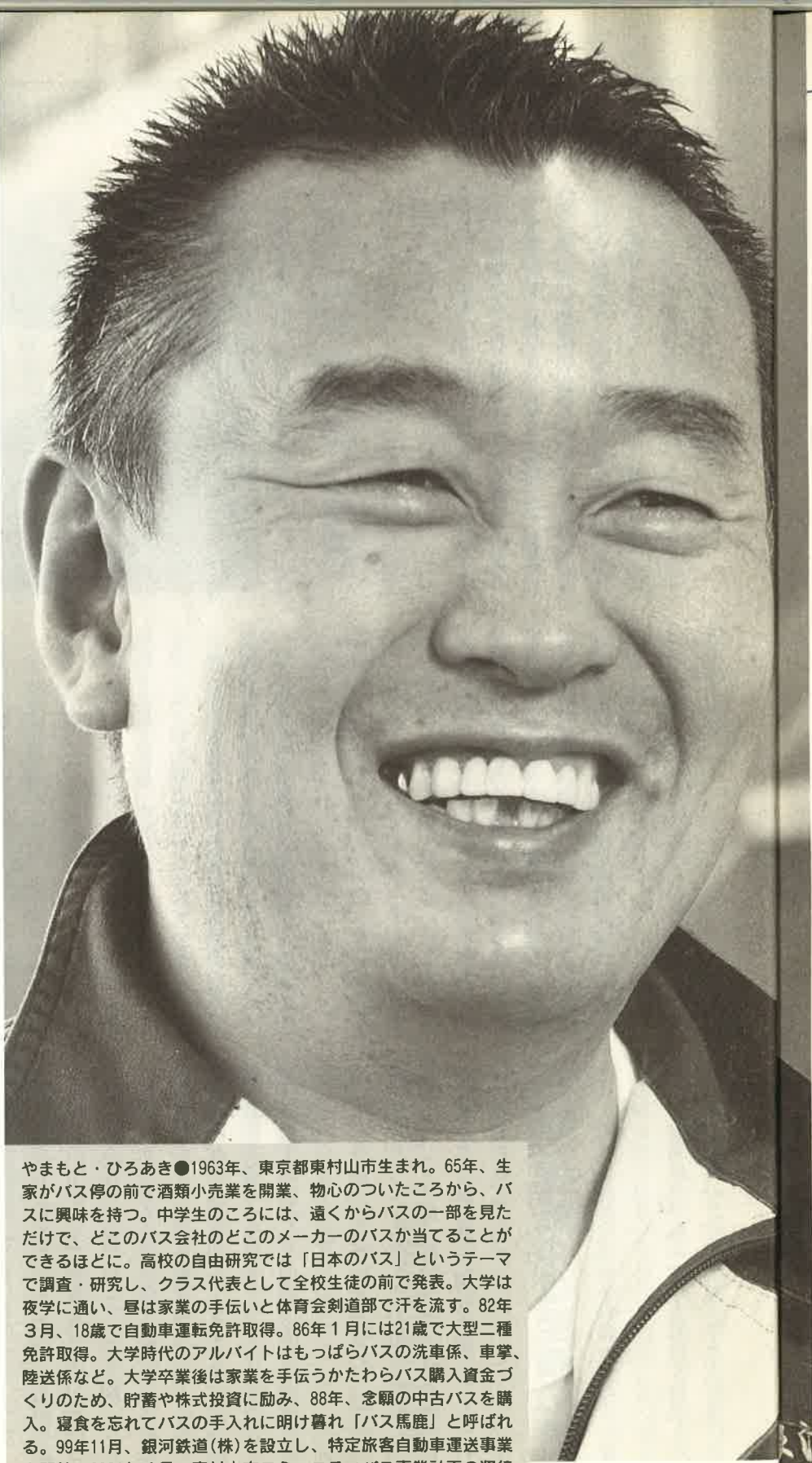
銀河鉄道株式会社 代表取締役

山本宏昭

「自分の好きなバスの運転を続けながら生活でき、しかも、それで人に喜んでもらえる、公共に役立ち、地域も元気にできるのは、大きな名誉ですし、私にはお金になど代えられない喜びなのです」

ばそろいませんでした。それで、日曜日になると、母親に連れられてそこまで買い物に出かけたものです。もちろんバスで行くのですが、それが楽しみでたまりませんでしたね。いそいとバスに乗り込むと、本当は最前席に座りたかったのですが、そこは子ども一人掛けがたいいてい禁止されていたので、できるだけ運転席に近い席に座りました。あとは運転士のようすを食い入るように見ているのですが、何しろ嬉しくて、知らないうちに顔がにんまりしていたようで、よく母親に「バカみたいだから笑わないで」と言われたものです。大きなバスが滑らかに走っていくようすがたまりませんでした。

帰宅してからはシミュレーションです。バスが通った道を思い起こし、どこでどういう運転をしたか、ギアはどこで変えたかなど、エンジン音やブレーキ音を口ずさんでイメージしながら同じようにやってみるのです。この積み重ねだけで随分運転を覚えてしまったのだと思います。自分もいつか路線バスの運転士になりたいと夢見るようになりました。学校の遠足のときにも、どんなお弁当やお菓子を持って行くかより、どのメーカーのバスが来るか、三菱か日野かです。か……に興味が津々で、集合時の話はまったく耳に入らず、もっぱら校庭に停まっているバスは



やまもと・ひろあき ●1963年、東京都東村山市生まれ。65年、生家バス停の前で酒類小売業を開業、物心のついたころから、バスに興味を持つ。中学生のころには、遠くからバスの一部を見ただけで、どこのバス会社のどのメーカーのバスか当てることができるほどに。高校の自由研究では「日本のバス」というテーマで調査・研究し、クラス代表として全校生徒の前で発表。大学は夜学に通い、昼は家業の手伝いと体育会剣道部で汗を流す。82年3月、18歳で自動車運転免許取得。86年1月には21歳で大型二種免許取得。大学時代のアルバイトはもっぱらバスの洗車係、車掌、陸送係など。大学卒業後は家業を手伝うかわらバス購入資金づくりのため、貯蓄や株式投資に励み、88年、念願の中古バスを購入。寝食を忘れてバスの手入れに明け暮れ「バス馬鹿」と呼ばれる。99年11月、銀河鉄道(株)を設立し、特定旅客自動車運送事業を開始。2001年4月、東村山市コミュニティバス事業計画の運行プラン策定事業者に選定。01年5月、一般貸切旅客自動車運送事業(観光バス事業)の許可が降り営業開始。現在、乗合バス事業として東村山市、小平市、小金井市で路線バスも運行。

かり眺めていました。

バスに乗ってる間も、私が注目していたのは運転士の運転操作で、エンジンの音に耳を傾け、ギアチェンジの場所やハンドルを切ったところを確認。帰ればまたもやシミュレーションです。

自由時間に運転士をつかまえて、いろいろ質問攻めにしたこともありました。どうやって

たらバスの運転士になれるかとか、バスのギアが2から発進するのはなぜかなどでしたが、運転士はきちんと答えてくれました。バスの運転には大型2種という免許が必要なおも

そうやって教わりました。

バスの運転士というのは職人ですから、ちよつと寄り付き難いところがあるのですが、話しかけるチャンスをつかまないと、大人に接するタイミングを掴む経験が積んだのだと思います。敬語も考えて使いましたし、バ



スを通していい勉強をしましたね。

中学以降は剣道一直線

——その後もバス運転士を夢見続けたのでしょうか。

山本 バス好きはもちろん変わりませんでしたが、成長とともに気づいたことがあります。それは、世間でバス好きと言っているのは、せいぜい幼稚園か小学校低学年までだということです。中学生や高校生になってバスが好きだと言うと、ちよつといかれた奴だと思われるのが落ちなのです。それでだんだん口に出せなくなりました。

ただ口には出さずにいました。

明治学院大学体育会剣道部1年部員的时候は、監督の付き人として、お風呂やお迎えなどのお世話をしていました。監督が人と会うときなども同席するのですが、あるとき、話のなかに富士急(富士急行株式会社)の堀内光男会長のことが出てきたのです。バス通の私としては聞き逃せない話ですよ。そのうち、監督が話している戦友が堀内会長の弟だということがわかり、私は思わず身を乗り出して、「一度でいいから、アルバイトでバスを運転させて」と頼んだのです。

「お金はいらないから」「回送バスでいいから」と畳みかけるようにして交渉しました。初めてのチャンスに、それまで溜め込んできたバスへの想いが溢れたのでしょうか。実は、このとき既に大型二種の免許を取得していました。後に取得する大型二種というのは、乗車定員30人以上の営業用車両のための免許(平成19年改正)で、プロのトラック運転手さえ何度も受験しなければ合格できないほど難関の資格なのですが、何と私は21歳のときに、1回で合格、免許証を手に入れたのです。幼いときからの「シミュレーション」が功を奏したのでしょうか。円滑な運転動作と技術が自然に身につけていました。しかも、私は教習所には行かずに、試験場で直接取っ

小学校5年生になると、当時人気だった「おれは男だ!」というテレビドラマに憧れて剣道を始めます。友達3人で始めたのですが、おもしろくてどんどん引き込まれていきました。中学受験の折も、詰め襟で防具を担ぐ姿をイメージする硬派でしたが、ブレーザーにネクタイという制服の明治学院に入りました。

そこには剣道部がなかったため剣道同好会をつくりましたが、同好会というのは予算がつかない。それで何とか部に昇格させようと、生徒会長に立候補、当選して剣道部を誕生させました。剣の道にのめり込んでいき、ミッション系の学校なのに、道場に神棚をつくって先生に怒られるなんてこともありました。

——その後の生き方に影響を与えたような出会いが学校時代にありましたか。

山本 剣道部の顧問だった日体大の御大・恵良照義先生の下、空手部歴代主将の山田喜美雄、種村輝男先生と出会い、いまなお師弟関係が続いています。厳しくとも筋の通った先生方の姿に大きく影響を受けました。人生で自分の役割をどう果たすかが問題だ、仕事の目的はお金ではない、苦しくとも自分の持ち場から逃げるななど、その後の指針となるような教えをいくつも受けました。教師が自分にも職業にも誇りを持っているのが伝わってきました。

たのでした。

合格したときに、試験場の教官は私を別室に呼んで、本当は免許をあげたくないのだと言ったのです。私の運転技量は満点だから合格には足りないけれど、大型二種という免許は大勢の人の命を預かるものだから、社会的経験のない若者には交付したくないと言っています。不注意や不手際で万一のことが起きても、ごめんなさいではすまないのだと試験官は厳しい表情で言い、そのことを肝に銘じて、社会的責任を持って運転するようにと戒められました。

試験官の話はなるほどその通りだなと思いました。剣道でも4段を取ることは誇らしいけれど、それは今後精進すれば4段の品格を身につける可能性があるということで、4段取得イコール4段にふさわしい価値を持つということではないのです。それとまったく同じだと納得できました。

そんなわけで富士急行バスでは、夏休みに走る新宿発山中湖行き定期バスの増発便に、車掌として乗せてもらいました。きつぷを販売したり、お客さんの世話をしたりでしたが、運転席の横で、もう嬉しくて嬉しくて最高の気分を味わいました。

その後、多摩日野自動車で車両陸送のアルバイトをしたときも、大満足の時を過ごしま

そもそも教師から見れば生徒は「多」ですから、一人ひとりを覚えているのは無理でしょうが、生徒にとっては「一人の先生」なのです。その「一人」から何か勇気の出るような言葉をもらえれば、生徒はそれを糧に少しずつ生きていけるほどののです。そのことを最近の教師は意識しているのでしょうか。また、中学生・高校生ともなれば、教師のことを一人の人間として見るものです。そのことにも教師は気づいているのでしょうか。

最近のいろいろな出来事を見聞きしていると、教師がその立場を安売りしているように思えて、そのたびに悲しくなります。教師には、教えることより優先するものはないはずですよ。教師としての誇りというのは、いまはどう受け取られているのでしょうか。生徒が欲しいのは、本当に友達感覚の、「同等」な教師なのではないでしょうか。それは親子関係にも言えるでしょうが、私などは、やはり教師には「優しさ」「怖さ」の両方を備えてもらいたいと思います。

バスの運転中は至福の時

——初めてバスを運転されたときのことをお聞かせください。

山本 剣道は大学に入っても続けていましたが、もちろんバスのこともずっと大好きで、

した。乗客のいない空の観光バスを所定の場所まで運ぶのに、せっかくだからと遠回りをしていたら、同じバス会社の人間に見つかったり、同社の路線バスとすれ違ったら、バスの運転手は私を観光バスの本物の運転手と思っけて片手を上げて合図をしてくれ、こちらも有頂天になってそれに応えたりと、とにかくバスの運転中は至福の時でした。

ついに「銀河鉄道」創設

——「銀河鉄道」を立ち上げたのは、どのような経緯でしたか。

山本 大学卒業後、とにかく私はバスの運転士になりました。プロとして運転で勝負したかったのです。しかし、現実には厳しくて、バス会社は高校生が経験者しか採用しませんでした。観光バスの運転士も、路線バスの経験者が推薦を受けてなれるという具合に、長い年月がかかりました。たとえば、35歳以上で既婚、トラック・バスの運転経験者といった条件がありました。

仕方なく家業の酒屋を手伝いながら、節約に節約を重ね、また、株などもやり、23歳のときに遂に中古バスを購入しました。そんなにバスがいいのなら、自分で稼いで買って乗ればいいのだと発想の転換をしたのです。

せっかくだと大学まで行かせたのにと、父は私

「銀河鉄道」で地域を元気にしたい

の「バス一途」に大反対でしたが、私は酒屋が休みの日は、朝から晩までバスを磨いて手入れに余念がありませんでした。地元の絨毯メーカーから端切れをもらい、それをバスに敷いて土足厳禁にするなど、大事に大事に扱ったせいで、2台目を買うときには高い値段で売れました。バスを運転するときはいつも黒い革靴に白い手袋、制帽、制服らしきものも揃えて、すっかりその気になって運転していました。

しかし、如何せん白ナンバーです。好きなバスを動かすだけで、お金もうけなどしていないのに、白ナンバーはどうも悪いイメージで肩身が狭い。しかも私の夢はバスを所有することではなくて、バスの運転士になることでしたからね。そうかと言って、バス会社を新規に設立するには、当時はまだ規制が厳しく、条件は車両が20〜30台、しかも新車で、車庫用地は自己所有が原則、抱える従業員の給料は3か月分あらかじめ確保されていないと……という具合でした。

それが幸運にも、小泉首相のときに規制緩和が進み、中古を含め5台でバス会社が興せるようになったのです。廃車寸前のようなキヤラバンを改造してナンバープレートをつけ、どうにか数合わせをして、1999年にバス会社「銀河鉄道」を設立しました。

スを目指したのです。会社の方針が浸透したのか、乗客数も次第に増えていきました。

人に喜んでもらえる喜び

—— 続いて路線バスへの参入を決意されました。

山本 06年に道路運送法が改正されると、それまでの貸し切りバス事業の許可ではコミュニティバスの運行ができなくなりました。新たに路線バスの許可も必要になったのです。ピンチではありませんでしたが、私はチャンスだと受け取り、このときとばかりに路線バスの事業許可を取り、いよいよ念願の路線バス事業に参入する決心をしました。一気に中古バスを5台購入し、保有台数を16台とし、社員も20人に増やし、新体制を組んだのです。

東村山市にも大手の路線バス会社が運行していましたので、私が気になったのは一般バスが通らない地域で不便に耐えて暮らしているお年寄りや、雨でも自転車通勤するしかない学生たちのことでした。彼らの足として役に立ちたい。赤字覚悟で構わない。そんな思いが私のなかで燃え始めたのです。

08年からは、東村山市、小平市、小金井市の、特に交通が不便な地域をカバーするべく、3つのルートで路線バスを走らせています。もちろん私も、運転士として大好きなバスに

バスを使った事業には、観光バスなどの貸し切りバス事業、路線バスを走らせる乗り合いバス事業、それに特定組織のための特定バス事業などがあります。

設立当初は、斎場まで利用者を運ぶ特定バス事業や、知り合いの旅行グループを対象にした観光バスなどの事業を手がけていたことが、不況の影響で旅行自体が減少。加えて大手の独占する業界に参入したことを思い知らされるような出来事も重なり、経営は行き詰まり、社内に遊んでいる車両が増えてきました。次にできることは何だろうか。私はバスを使ってできる新たな事業を考え始めたのです。

安全で時刻表通りのバスを

—— その後はどんなバス事業を興したのですか。

山本 当時、周りを見渡すと、住民の手軽な移動手段としてコミュニティバスを導入している自治体が東京でも増えていました。東村山市もコミュニティバスを始めたらどうだろうかと市長に直接提案、掛け合ったところ、OKが出たのでさっそくコンベの準備を開始しました。

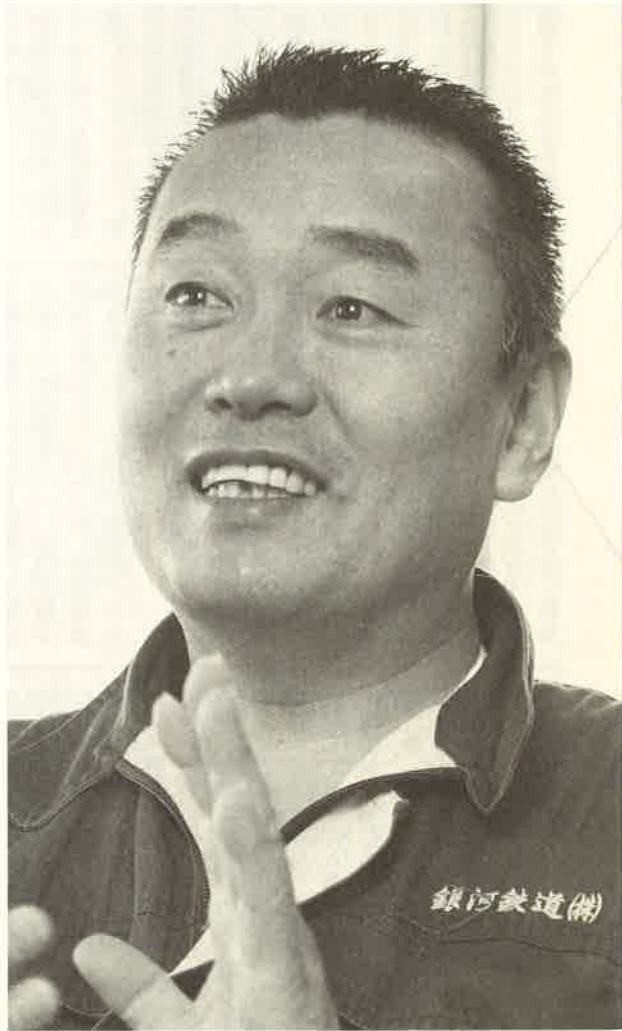
コンベには大手企業も含め7社が参加しましたが、「銀河鉄道」は積み重ねると厚さ5センチにもなる資料を用意し、A4用紙4枚程

度という競合他社に対抗しました。

もちろん資料の量だけでなく、質にもこだわりました。たとえば、所定の運行区間を実際に試走して問題点を指摘、併せて利用者の生の声もリサーチするなど、プレゼンテーションを尽くしたわけです。また、コンベ参加の大手企業が仮に選ばれたとしても、東村山市内に営業所がないから市内に利益は還元されないが、地元企業が選ばれば同時に町興こしにもつながると、「売り」を強調することも忘れませんでした。地域を元気にするという発想はこのときから生まれたのです。

熱意を込めたアピールの甲斐あって、社員10人未満という小さな「銀河鉄道」が、東村山市のコミュニティバスの運行事業者として選ばれました。

住民の足となるコミュニティバスなので、利用者から信頼されることが何より大事になります。そのために私は、運行の安全と正確さをまず第一に求めました。バスだから遅れるのは仕方ないという意識が、利用者にも運転士にもある。利用者のそれは経験からくるものでしょうが、運転士の場合は経験は甘えです。バスでも時刻表通りに正確に運行できるのだということを運転士たちには徹底させました。また、街路樹などの障害物にも細心の注意を払わせ、安全で正確に走るバ



乗務しています。

—— ついに子どものころの夢が実現したのですね。

山本 夢を持つこと、持ち続けることは素晴らしいことです。私はそれを地域で果たせることが何より幸せだと感じています。

中高時代、毎朝の礼拝で聞かされた「地の塩 世の光」という言葉を思い出します。私はクリスチャンではありませんが、この隠し味としての塩、料理にうまみや甘みを加える塩の力が、人間の世界でもものをいうと確信しているのです。

俺が俺がと主張するのではなく、自分の周りを明るくすることに心を砕く。トップにな

ることを目指すのではなく、自分の使命を自らの力に感じて果たせるように努める。一流企業にすることや高収入の社長になることが私の夢ではないのです。

自分の好きなことを続けながら生活し、しかもそれが人に喜んでもらえて公共に役立つていることは、大きな名誉ですし、私にはお金に代えられない喜びなのです。

相変わらず不景気が続く路線バス業界。新型のノンステップバスなど到底用意できませんが、安全・正確の確保を合言葉に何とか市民の足を維持できるよう、そして地域が元気になるよう、今後もハンドルを握りながら頑張ります。